

国文研ニュース

No.60 WINTER 2022



とくたいせんびつご
『得泰船筆語』

目次

●メッセージ

デジタルとリアル縁 大隅 典子 1

●エッセイ

「つくる年表」再考 杉本まゆ子 2

魯文研と共同研究 富塚 昌輝 4

日本古典籍講習会に参加して 飯田 実花 6

●トピックス

地域の資料を地域の皆さまに

—正宗文庫セミナー2021／賀茂真淵セミナー2021／山田孝雄文庫セミナー2021報告— 神作 研一 7

西大寺縁起絵巻断簡からみる信仰の一齣 川崎 剛志 8

第14回日本古典文学学術賞受賞者発表 9

第14回日本古典文学学術賞選考講評 高野 晴代, 田中 大士 9

「絵にかきたる」ような物語と絵に映る歴史 —日本古典籍セミナー北京2020— 趙 小菁 11

特別展示「復興を支える地域の文化 —3.11から10年」 西村慎太郎 12

企画展示「国文研ってどんなところ? ～多摩地域ゆかりの所蔵品とともに～」 糸 汐里 12

2021年度こくぶんけんカフェ 渋沢栄一生誕記念「渋沢青淵翁記念実業博物館」の再現 糸 汐里 13

電子展示室「和書のさまざま」公開のお知らせ 北村 啓子 13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況 14

国文学研究資料館創立50周年記念式典・講演会・展示のお知らせ 西村慎太郎 15

デジタルとリアル^{えにし}の縁

大隅 典子（国文学研究資料館運営委員、東北大学副学長・附属図書館長）

このたびご縁があり国文学研究資料館（国文研）の運営委員を拝命致しました。東北大学で附属図書館長を務めていることが、一つのきっかけとしますので、本学附属図書館のことを少しご紹介させていただきます。

東北大学は日本で3番目の帝国大学として1907年に創立されましたが、附属図書館は1911年になってようやく設置されました。本稿を執筆している2021年の6月は、ちょうど110周年の節目だったのですが、昨年からのコロナ禍により、きちんとお祝いできなかったことは残念です。当時の図書館の建物は、総長他の執行部が執務を行う片平というキャンパスにあり、現在は本学の史料館として利用されていますが、2017年に有形文化財として登録されました。附属図書館の本館は川内^{かわうち}という、新入生やいわゆる文系の学生と関係する教職員が通うキャンパスにあり、医学分館、北青葉山分館、工学分館、農学分館の4つの分館を合わせて約420万冊の蔵書と約9万冊の雑誌を収蔵しています。

当館の書籍・資料等の収集にあたっては、本学初代総長・澤柳政太郎^{さわらぎまさたろう}の貢献もあり、京都帝国大学文科大学初代学長を務めた狩野亨吉^{かののこうきち}の貴重な旧蔵書約108,000冊が「狩野文庫」として収められ、国宝も2点、中国と日本を代表する歴史書「史記（孝文本紀第十）」と「類聚国史（巻第二十五）」が含まれています。

この狩野文庫に関して、国文研のデジタルアーカイブプロジェクトにご協力させていただくこととなり、2020年9月に第一弾として公開された232点を皮切りとして、国文研の「新日本古典籍総合データベース」に収録されています。この公開を記念して、同年12月に前国文研館長のロバート キャンベル先生をお招きし、オンラインでのご講演をいただきました。文学・哲学・科学から美術、兵学までを網羅する狩野文庫は、「古典の百科全書」「江戸学の宝庫」として世界的に知られていますが、デジタル情報としてインターネットを介して誰もがアクセスできるようになったことは、貴重資料を適切に保管しつつ、ユーザに利用していただくという意味で、重要なミッションを国文研と協働して行っていることを誇りに思います。

狩野亨吉と縁のあった夏目漱石の旧蔵書や自筆資料についても、「漱石文庫」として当館で収蔵しています。こちらは1944年、漱石の愛弟子であった小宮豊隆^{こみやゆたか}が本学附属図書館長を務めていたために早稲田南町の漱石旧居から仙台に移され、幸いなことに戦禍を免れたのでした。この貴重な漱石文庫を多数の方に公開することを目的とし、東北大学附

属図書館では2019年に「漱石の肉筆を後世へ！漱石文庫デジタルアーカイブプロジェクト」というクラウドファンディングを行いました。市民から4,687,000円ものご支援を頂き、3,000点を超える資料のうち、2020年末に自筆資料および周辺資料792点、蔵書1点（7,620コマ分）を公開しました（https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000398tuldc）。ちょうど、日本経済新聞に伊集院静氏が『ミチクサ先生』という小説を連載していたタイミングと重なり、小説に記載された手紙を探すなどの喜びがありました。

当館が提供しているのは書籍や雑誌だけでなく、「電子ジャーナル」も約1万4千タイトルを購読しています。とくにいわゆる“理系”分野では近年、学術情報は電子ジャーナルにデジタルな論文として掲載され、さらに「オープンアクセス（OA）」として公開されることが多くなってきました。OA論文の方が、世界中の研究者の目に届きやすくなり、結果として研究成果を知ってもらい、「引用」という形でさらに広まることになります。

図書館や博物館等は公共財としての役割があります。大学の設置基準の1つとなっている大学図書館の主要なステークホルダーは学生や教職員ですが、上記のような学術情報のOA化やデジタルアーカイブ事業は、今後、ますます重要になっていくと思います。世界中の誰もが最新の（あるいは過去の）研究成果や貴重な資料にアクセスできることは「知の府」としての重要なサービスです。一方で、現物（もしくはそれに近いレプリカなど）に触れるリアルな体験も欠かせません。デジタルな「情報」はヴァーチャルに二次元として表現されることが一般的ですが、実体としての書籍や資料は三次元であり、さらに手に取ることであれば重さを感じ、紙の質感やインクなどの匂いなどを伴うこともあるでしょう。そのように五感をフルに刺激されることは、脳の中で（おそらく）ドーパミンという神経伝達物質の放出を伴い、記憶はより強化されることになります。

図書館長として羨ましいことに、国文研は広い展示スペースを備え、工夫を凝らした企画展示や特別展示を行ってこられました。新型コロナウイルス感染症対応のために、一時は展示公開にも影響があったものと拝察しますが、ウィズコロナの時代にあっても、感染症対策を講じた上で、リアルな展示を行うことは大切な営みだと思います。いつか近いうちに、立川の国文研を訪問させていただきたいと願っています。

「つくる年表」再考

杉本 まゆ子 (国文学研究資料館学術資料委員会委員、宮内庁書陵部図書課文書研究官)

私は、1995～97年度に国文学研究資料館（以下国文研とします）研究情報部にて、主として二十一代集データベースを担当していました。成果はCD-ROMで販売し、現在は古典選集本文データベースの一部になっています。その後1999年より現職（宮内庁書陵部）に就きました。入庁して数年で所蔵資料目録の電算化、インターネット公開、画像の公開という話になり、本業である図書寮文庫の未整理図書の調査整理の他に、書陵部所蔵資料目録・画像公開システム (<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/> (初年度は図書寮文庫所蔵資料目録・画像公開システム)) に立ち上げから関わって現在に至っています。私の研学生活のひとつの柱を作ってくれたのがこのデータベース（以下DB）の仕事です。

さてこのエッセイでは、四半世紀前の国文学者のコンピュータ周りの昔話とその頃考えていたDB、そして現在それを活かすとしたらどうするかを妄想をお話したいと思います。

これをお読みの方の中には、生まれてない方もあるでしょう。1995年。ちょうどこの年の11月に windows95の日本語版が発売になりました。そして翌年8月には多くの国文学者が恩恵を蒙っているDB『新編国歌大観』のCD-ROMが発売され、当時の国文学者の多くはこの『新編国歌大観』以降に個人でパソコンを持ったのではないかと思います。国文研のイベントの折、開発中の二十一代集DBのデモンストレーションで、マウスを逆さに持った方がありました。マウスなんだから尻尾（コード）が下（手首側）だろうと。真顔です。そんな時代でした。“触らない”ことに誇りを持っているような方もおられました。まだコンピュータが道具になりきってなかったのでしょうか。データ通信もパソコン通信からインターネットへの転換期でした。

2000年でもまだ目録データの電算化は面倒でした。たとえば、「裸子内親王家歌合」と入力しようにもシフトJISには文字がありません。ユニコードならば「U+7996」で「祿」が出るのですが。人名や漢籍の書名にはほとんど困っていましたので、冊子体目録全ページを画像として提供しよう

かと考えていました。実際そうされていた所もあったと記憶しています。すべての言語が交ぜ書きにできるユニコードの恩恵は計り知れません。

そしてようやく2013年に書陵部図書寮文庫でも目録DBをウェブ公開する運びとなったのですが、画像公開の予算も撮影の時間も無いので、国文研の日本古典籍総合目録DBでデジタル化された書陵部資料にリンクをはる形をとらせていただきました。立ち上げ時には国文研3847件、自前の画像は52件でした。リンク形式により、限られた予算で公開を進められサーバ代も節約できる、非常に有り難いことです。現在国文研のデータはDOIが示されているので、書陵部から安心してリンクをはることができます。宣伝しておきますと、現在は書陵部の公開システム及び国文研（新日本古典籍総合データベース）・漢籍集覧で公開している図書寮文庫本のデータはすかしも外し、ダウンロードが可能です。

さて話は戻って1996年。国文研の「コンピュータ国文学」シンポジウムで「共有化をめざして—国文研データから暦日型への統合・平安中期100年間を例に—」という口頭発表を致しました。

文学作品、古記録、論文、マイクロ資料目録などあらゆるものを暦日で管理しようという「動く大日本史料」を目指した提案でしたが、実際に動かそうとするとフルテキストデータから日付情報をすべて切り出す必要があり手間がかかります。その上、日付情報は「天徳庚申」「保延のころおひ」「花山院の御代」のように自動的に入力しにくいものに一手間かけるテーブルが必要です。そしてまずは自分の為に動かせるようにして、その後ソフトを公開して皆のデータを集積して共有化して動かす拡張性を求めたDBでした。ほどなく東京大学史料編纂所の「大日本史料総合データベース」(<https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/>)がウェブ公開された為お払い箱でした。

このエッセイのお話が来て、25年前のこれを現代に生かすとしたらどうするかを妄想しました。

古記録、古文書、奥書・識語、行事に付随する絵画など、

日付情報があるインターネット画像を対象として、みんなで暦日情報・書名・概要・画像の所在 URL・ハッシュタグを入力する、参加型のウェブ DB「つくる年表」です。翻字した論文がリポジトリにあればその URL もついでに記載します。そのまま見ると年表のように一覽で並んでいるのですが、「# 災害」等ハッシュタグで寄せることや、「地震」と全文検索して表示することもできるようにします。表示としては、

正和6年(1317)1月3日,花園院宸記(巻9),
 已剋大地震、近代未曾有程大地震也、良久後動止,
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100179189/viewer/323>
 (DOI: 10.20730/100179189), # 災害 # 原本 # 近畿

となります(当該箇所の画像を上げておきます)。東日本大震災以降、史料から災害を読み解く試みが多くなされ、ウェブアプリ「みんなで翻刻」も地震史料の翻刻を契機とされたことは有名です(<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2017-01-10>)。

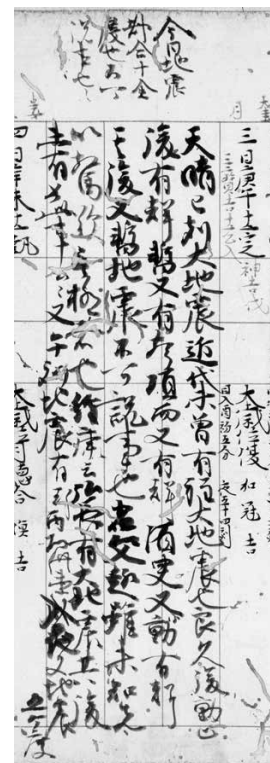
また小秋元段氏が国文研ニュース58号でも取り上げられていた古今和歌集以下マイクロ資料目録の奥書情報、これとデジタル画像の組み合わせはかなり有望です。場所についてのハッシュタグは、図書館文庫の本ではほとんどが京都で作られたものなのであまり機能しませんが、古文書以外にも奥書等で作成場所が特定できる場合などには有効です。連歌師に伴う書物の移動など心躍るものがあります。また、翻字は研究成果物の根拠となる研究データとして、画像と照らし合わせて検証できることが必要になると思います(翻字を公開している側からは恐ろしいことでもあります)。

現在の所蔵品 DB は元号か時代名で表すものが多く、通史的に並べることが苦手なものが多いようです。筆者の生没年などを含めて、とにかく最低限の日付情報を入れてウェブ上に載せる器を作ることです。学際的・公共的な活用だけでなくエンターテインメントの発想のもとにもなるでしょう。

現在、博物館・図書館等の所蔵資料はデジタルアーカイブ化されるようになりました。国文研やジャパンサーチ(<https://jpsearch.go.jp/>)などがプラットフォームになって、デジタルコンテンツの合い言葉であった“居ながらにして閲覧”は当たり前になりました。コロナ禍でより必要

とされていますが、貴重な資料を扱える撮影者、撮影場所、デジタルデータを作る人が急に増えることはありません。今あるデータを使いやすくしていくことも必要でしょう。今案の DB では所在 URL を記していますが、所蔵者としては今有る画像がどれだけ閲覧されているかは気になるところです。提供元のウェブサイトを表示したいと考える所以です。そのサイトで(国文研も使用の)IIIFのビューアを使用していれば画像の表示の自由度も上がります。

私は数年前までは、「みんなで翻刻」や、くずし字学習支援アプリ「KuLA」(<https://kula.honkoku.org/>) AI くずし字認識アプリ「みを(miwo)」(<http://codh.rois.ac.jp/miwo/>)を使って、翻刻に興味を持って頂ける今の姿を想像したことがありませんでした。OCRの精度は深層学習で上がるだろうけれども、読ませる資料を決めるのは日本文学や日本史の研究者だと思っており、裾野が広がることを熱望して DB に関わってきましたが、どこかで諦めてもいました。しかし今は、「それを作れば、彼がやってくる(If you build it, he will come.)」映画『Field of Dreams』の台詞ではありませんが、DB を作ればデータを寄せてくれる時代が来ているのではないかと思います。



『花園院宸記』(宮内庁書陵部蔵)

魯文研と共同研究

富塚 昌輝（国文学研究資料館共同研究委員会委員、中央大学文学部准教授）

共同研究について一言との注文をいただきました。大所より何かを述べられるほどの経験も見識もありませんので、かつて私が参加した「開化期戯作の社会史研究」（2004年度～2009年度、研究代表者：谷川恵一。通称「魯文研」）について記すことでその責をふさぎたいと思います。とは言え、私は魯文研に最初から参加していたメンバーというわけではありません。共同研究の最晩期に2度ほど研究会に参加したという程度で、もとより魯文研について何か話すことのできる立場にはありません。ただ、個人で研究を進めていた大学院生が、共同研究の持つ可能性にはじめて触れた経験として、少しでも何かの足しになればと思います。

魯文研は、「（仮名垣）魯文を中心とする戯作者たちの活動を実証的に再検討することで、幕末の草双紙から明治になって新たに登場する新聞などのメディアまで、多岐にわたるそれら著述の全貌を明らかにし、これまでの通り一遍の評価を再検討すること」（「共同研究成果報告書」https://www.nijl.ac.jp/activity/img/21-11_kyodokenkyuseikahokoku.pdf）を目的とした共同研究です。研究組織として22名の名前が挙げられていますが、活動報告を見るとさらに多くの研究者が参加しています。魯文の著作の全貌を明らかにするという空前の試みは、多くのマンパワーを投入する共同研究によってはじめて可能になったのだと思います。魯文研の精力的な資料収集によって、国文研に魯文の著作にかかわる重厚なコレクションが形成されたことは、本共同研究の大きな成果であると思います。

さらに、魯文研の研究会では魯文の著作についての詳細な解題が付けられました。加藤禎行「シンポジウム「江戸から明治へ—仮名垣魯文を中心として—」と特別展「仮名垣魯文百覧会」」（『日本近代文学』2007年5月）には、研究代表者の谷川恵一氏の言葉として「残存する出版物や文学資料の網羅的検討と、それに伴う具体的事実からアプローチする」という魯文研の研究姿勢が紹介されています。そうした姿勢は、魯文研の成果である『原典資料の調査を基礎とした仮名垣魯文の著述活動に関する総合的研究』（2008年、科学研究補助金（基盤研究（B））研究成果報告書）にまとめられた魯文の著作についての詳細な解題に、はっきりと見て取ることができます。

こうした「具体的事実からアプローチする」方法によって、これまでの文学史における仮名垣魯文の位置づけを根本から見直し、新しい魯文像を提出することが目指されることとなります。膨大な資料を集め、それを一つ一つ精査して詳しい解題をつけることが、従来の史の見取り図を問い直し新しい展望をひらいていくことにつながっていくわけです。こうした作業も独力で成し遂げることは難しく、共同研究ならではのものだと思います。

谷川恵一氏は「資料と方法」（『日本近代文学』2019年11月）で、1927年1月に東京銀座の松屋で開催された明治文芸研究資料展覧会を取り上げながら、大量の「資料」を収集することが文学史の「単純なモデルを脅かす過剰」さを持つことを指摘しています。魯文研が開催した「仮名垣魯文百覧会」（2006年10月17日～11月2日、於：国文学研究資料館）に、明治文芸研究資料展覧会への意識があったかどうかはわかりませんが、100点を超える魯文資料の展示が、これまでの文学史における魯文の位置づけを脅かすのに十分であったことは間違いありません。このような展示形式は、資料を収集することを一つの目的とした魯文研にとって、とても有効な成果の公表方法であったと思います。研究の出口が研究のやり方を方向づけるという側面もあると思いますので、論文発表やシンポジウム開催だけでなく、様々な研究成果の公表の仕方を構想することで共同研究の幅がひろがるのではないかと思います。

「具体的事実からアプローチする」という方法、そしてそれによって従来の文学史を見直そうとする姿勢は、魯文研に集まった研究者に共有された問題意識であったと思います。高木元「鈍亭時代の魯文」（『千葉大学社会文化科学研究』2005年3月）などの諸論考、佐々木亨『明治戯作の研究—草双紙を中心として—』（2009年、早稲田大学出版部）、松原真『自由民権運動と戯作者—明治一〇年代の仮名垣魯文とその門弟—』（2013年、和泉書院）、山本和明『近世戯作の〈近代〉—継承と断絶の出版文化史』（2019年、勉誠出版）など、魯文研に集まった研究者の論考や著書が活発に発表されており、仮名垣魯文あるいは明治期の戯作に関する研究はこれまでにないほどの活況を見せています。それらの研究に共通する問題意識は、仮名垣魯文の文学史的な位置づけを再考することを通して、文学史のモデルそのものを問い直そうとする姿勢であると言えます。そうした展開も含めて、加藤禎行氏が先の文章で魯文研が主催したシンポジウム「江戸から明治へ—仮名垣魯文を中心として—」（2006年10月20日）について次のようにまとめたことは、まったく大げさではないと思うのです。

このシンポジウムに参加して筆者が最も強く感じたのは、日本近代文学研究の手法が、魯文とその著作群に対峙したとき、強く揺さぶられてしまう事態の深刻さである。穿ち、パロディ、韜晦の向こう側に浮かぶ魯文像は、たやすく揺らぎ、安定的な作家像を構築することが困難だし、個々の著述に〈主題〉を見出そうと生真面目に考え込んだところで、きっと魯文の著述はその見出された〈主題〉を、いともたやすく裏切るはずだ。その著述のオリジナリティを検討する場合も、多種多様な叙述を摂取し、それを変型加工することに長けた

魯文の著述は、きっと筆者を遭難させるに違いない。筆者にとっては、日本近代文学から日本近世文学の側へと、その連続性を見通していけるような視線の重要性を、改めて強く意識させられたシンポジウムであった。

加藤氏の文章からは、日本近世文学研究と日本近代文学研究がそれぞれのディシプリンを超えて共同したことのインパクトについても知ることができます。この点も研究領域や手法を異にする研究者が相互に影響を与えあう共同研究の特徴なのではないかと思えます。

私も魯文の「くどき」ものの調査を担当することで、魯文の著作活動の広がりや、その一端ではありますが確かめることができました。魯文が書いたと思われるくどきについては、『浅草御蔵前女のあた打くどきぶし』（都立中央図書館蔵）、『朝倉当吾やんれぶしくどき』（大阪大学忍頂寺文庫蔵）、『甲府地名くらべまち尽し恋路のくどき』（個人蔵。石川博「魯文「甲府地名くらべ」の翻刻・解題」（『甲斐』2011年10月）参照）、『佐倉宗吾一代くどき』（国会図書館蔵）、『大日本武勇かみくどきぶし』（大阪大学忍頂寺文庫蔵）、『東海道五ヶ国地震くどき』（都立中央図書館蔵）、『東海道程ヶ谷宿心中くどきやんれぶし』（大阪大学忍頂寺文庫蔵）、『新板豊あし原しら浪くどき』（個人蔵）、『評ばん釜ゆでくどき』（国文学研究資料館蔵）が確認されています。こうした著作群を見るだけでも、魯文の著作活動を「創意」（興津要「仮名垣魯文—文明開化の戯作者」1993年、有隣堂）という尺度ではかることの限界を感じます。

もう一つおもしろく思われることは、魯文研に集まった研究者のネットワークと問題意識の共有とが、その後の研究シーンにおいて陰に陽に姿を見せることです。例えば、2014年に発足した十九世紀文学研究会は、魯文研の中心メンバーを発起人としています。この会の趣意書には、「幕末維新期は「近代」への過渡期とする発展史観」によって把握されてきた従来の文学史に対して、「そうした発展史観を一旦留保して、専門の垣根を越えて、十九世紀という世界史

的な時代区分に従うことで、この幕末維新期＝過渡期という歴史観を解体し、発展史観の呪縛から自由になり、十九世紀という視座から「日本」文学の可能性を改めて見直してみようと思う」（山田俊治「十九世紀文学研究会について—付活字・出版・明治戯作—」『日本近代文学』2020年5月）と書かれています。ここには、魯文研の問題意識との重なりを読み取ることができます。このことは、魯文研が単に魯文の著作の全貌を明らかにして事たれりとするのではなく、より広い展望をもって構想されていたことのあらわれであるように思われます。そして、そこに集まった人たちの交流が、次の展開へとつながっていくという研究者ネットワークのダイナミズムを見て取ることができます。

私自身も、魯文研やその周辺での研究者との出会いは大きな財産になっています。特集「新聞メディアと文学—明治20年代」（『言語社会』2019年3月）は、松原真氏の呼びかけで同年代の研究者によって作られたものですが、この特集に松原氏を含めて魯文研に参加していたメンバーが複数人はいます。魯文研やその周辺での、特に若い（当時）研究者のネットワークがこのような形で一つの実を結んだことは、共同研究の利益の一つであると思えます。

共同研究の利点について気づいた範囲で述べてきましたが、共同研究にこのような可能性があるとするならば、そういった研究をどのように組織し実行していくか、あるいは特に若い研究者をどのように共同研究に巻き込んでいくかが課題になるかと思えます。

私の場合は、鈴木俊幸先生から「こんな研究会やってるの知ってる?」と謎をかけられたことが魯文研に参加するきっかけでした。きっかけは様々だと思いますが、ある若い研究者が既存の共同研究に関心を持った場合、途中からでも参加できるような隙間があると良いのではと思います。（もちろん共同研究の開閉の度合いにはそれぞれのねらいがあるわけですので、誰でも気軽に参加できることが良いというわけではありません。）

また、共同研究を人集めからはじめて新しく立ち上げることはとても大変です。その点、すでに研究者の間に交流がある場合には、共同研究を立ち上げやすいのではないかと思います。日本近現代文学研究の例ですが、近代文学合同研究会や日本近代文学若手研究者フォーラムなど、近年、若い研究者が大学の垣根を越えて集まり、魅力的な企画を立ち上げています。こうした若い研究者の集まりに対して、こちらから積極的にアプローチすることで、共同研究を推進させることができるかもしれません。

おそらくこれから後、共同研究の存在感はますます高まるのではないかと思います。共同研究は、たんに個人研究をパワーアップさせたものというわけではありませんので、共同研究を独自に構想し牽引していく力も求められるように思います。ただ、ことが文学にかかわる以上、個として対象と向き合う個人研究の意義はいささかも揺らぎません。共同研究と個人研究とが協働する文学研究の未来が期待されます。



仮名垣魯文「新板豊あし原しら浪くどき」（個人蔵）

日本古典籍講習会に参加して

飯田 実花（大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻日本文学専門分野博士前期課程二年）

令和3年7月6日～7日、「第4回若手研究者を対象とした日本古典籍講習会」に参加させていただきました。この講習会は、日本古典籍の所蔵機関の職員で現在古典籍を扱う業務を担当している方を対象として、同館と国立国会図書館が共同で開催されている「日本古典籍講習会」の、第1日・第2日のプログラムに相当します。「若手研究者を対象とし、日本古典籍書誌学の初歩的知識の修得を目的」として開催されました。第1回・第2回と国文学研究資料館で行われたようですが、新型コロナウイルス感染症の影響により昨年度（第3回）は中止、今年度はオンラインリアルタイム配信という形式で行われました。

オンライン開催ということもあり、200人近くが参加し、海外からの接続もあったそうです。実際に先生方やほかの受講生と顔を合わせ、古典籍に触れながらお話を聞くことができなかつたのは非常に残念でしたが、先生方は書画カメラなどのツールを利用し、できるだけ受講生にわかりやすいよう配慮してくださり、また質問も活発に飛び交い、充実した時間となりました。

はじめに神作研一先生が「はじめての古典籍 付 書誌用語概説」として全体の導入となるお話をしてくださいました。そこで指摘されたのは、書誌学における術語の重要性でした。そして同時に、その用語に対する認識が人それぞれ微妙に異なることの問題も指摘なさいました。書誌学が術語によって記述されていく以上、用いられる術語の統一は必須の課題といえるでしょう。ほかの先生方の各論においても、一つの術語がどのような意味の幅を持つのか、講義においてはどの意味で用いるのか、またどのような誤解が生じているのかなども示したうえで進めてくださいました。今回の講習会は、術語を受講生に共有し、術語の統一を図るためにも、重要な意味を持っていたのだと思います。

各論では、それぞれ「くずし字」「写本（奥書・識語）」「版本（刊記・奥付）」「蔵書印」「装訂・料紙」「表紙文様」「江戸の出版文化」「近代本の残り方」「資料保存の考え方と実践」をテーマに、講義していただきました。先生方は様々なツールを駆使し、古典籍と向き合ったときにどの部分を見る必要があるのか、そこから何を記録する必要があるのか、何がどこまでわかるのか／どこからはわからないのか、

それぞれ解説してくださいました。特に印象深かったのは、青田寿美先生の「蔵書印」の講義で伺った、部分的に消えて判読不能であった蔵書印を、データベースを活用することで解読できたというお話です。わたし自身、これまで資料と向き合った際に、蔵書印は見つけても読むことができずに困ってしまうことが多かったのですが、読むためのコツをレクチャーしてくださり、また読めた部分だけでも情報として記録していくことの重要性を教えてくださいました。部分的にしか解読できなかった蔵書印も、他の古典籍に残された蔵書印の情報と合わせれば解読できる場合があることを知り、一つ一つの調書入力が集合体としてより大きな意味を持つことを実感しました。先生方のお話は聞けば聞くほど実際に古典籍に触れたいという思いが強くなるもので、対面でお話を聞けなかつたのは非常に残念でしたが、この思いはまた、自身で様々な古典籍に触れるそのときに昇華したいと思います。

ところで、総論において神作先生は「古典籍は1000年生きることが証明されている」という印象的な言葉を発されました。今から1000年前、平安時代に書かれたものが現代にも残っているという事実は、デジタル化が進み次々とデバイスが更新されていく現代において、今存在する古典籍をこの先1000年残していくことができるという意味で、非常に勇気づけられることのように思います。一方で、この1000年で多くの古典籍が失われたのも事実です。1000年の間、「自然と残った」のではなく、それを残そうとした人々の手によって「残すことができた」ということは、青木睦先生の「資料保存の考え方と実践」のお話を聞いていた際に感じたことでした。新型コロナウイルス感染症や自然災害は人間の生命を脅かすものであると同時に、人間の叡智を詰め込んだ古典籍を脅かす存在でもあります。誰かの手によって残されてきた資料と真摯に向き合い、そこからできるだけ多くの情報を拾い上げられるようになりたいと強く感じた講習会でした。

大変な状況のなか、オンラインリアルタイム配信というかたちで、学びたいと思う多くの若手研究者の願いに応えてくださった先生方、国文学研究資料館の皆様は深く御礼申し上げます。ありがとうございました。またいつか、対面してお話を伺える日が来ることを願っております。

地域の資料を地域の皆さまに

—正宗文庫セミナー 2021 / 賀茂真淵セミナー 2021 / 山田孝雄文庫セミナー 2021 報告—

わたくしども国文研では、2019年度より、「機構長裁量経費」を財源として調査収集先の集中デジタル撮影を開始しています（「地域文化拠点所蔵資料の集中的整備に基づく研究基盤の確立」、*担当者は学術資料事業部長で、2019年度は神作研一、2020年度は入口敦志、2021年度は海野圭介）。「歴史的典籍NW事業」（2014～23年度）では対象としていない、学術資料事業部が管轄する調査収集先の中から特に5か所を取り上げて集中的にデジタル画像を集積し、日本文学研究の基盤形成に繋げようとするものです。

〈地域の資料を地域の皆さまに〉——集中デジタル撮影だけでなく、長年にわたる調査先との信頼関係のもと、各エリアの地域資料専門部会委員の先生方の御協力を得て、地域密着型の「日本古典籍セミナー」を開催しています。昨年度はまず富山市立図書館で「山田孝雄文庫セミナー2020」を（その概要は本誌58号〈2020年1月〉所載の岡田貴憲稿参照）、そして今年度は岡山・浜松・富山でそれぞれ標記のセミナーを実施しました。コロナ禍ゆえにやむを得ずオンラインでの開催となりましたが、各講師の先生方にはお心のこもった御講演を賜り、すべて盛況裡に終了したことを、ここに感謝の気持ちとともに報告します。格別のご尽力を賜った、登壇者の小川剛生・丸井貴史・川崎剛志（正宗文庫）、藤島綾・中川豊（賀茂真淵）、一戸渉（山田孝雄文庫）の先生方、ならびに正宗文庫の正宗千春理事長、賀茂真淵記念館の齋藤愼五館長、富山市立図書館の高嶋善秀館長・吉岡真和司書ほか御関係のすべての皆さまに、改めて心より御礼を申し上げます。

国文学研究資料館創立50周年記念事業

第1回 正宗文庫セミナー

正宗文庫は、国文学者で東洋の正宗義友（まことよしとも）が、明治19年（1886）～昭和33年（1958）、正宗自島の命が、丹精込めて蒐集した自集蔵・文章・複製を中心として昭和19年（1953）に複製出版された伊勢村大正複製（現 岡山県備前市）に由来した文章である。

複製数は7695点（2000刷）あり、現在は一般財団法人正宗文庫（正宮千春理事長）によって集積管理されている。

【講師】
国文学研究資料館 学術資料事業部長 藤島綾（あや）
国文学研究資料館 学術資料事業部長 小川剛生（たけふみ）
国文学研究資料館 学術資料事業部長 丸井貴史（たかひ）
国文学研究資料館 学術資料事業部長 川崎剛志（たけし）

【開催日時】2021年（令和3年）9月20日（月・祝）13:30～16:30

【場所】Zoomミーティングによるオンライン開催
※Zoomミーティングのインストールがまだの方は、事前にインストールをお願いします。

【定員】150名

【申込方法】事前申込制 先着順
①Eメール info@kokugakuin.or.jp
②QRコード <https://www.kokugakuin.or.jp/zoom>
③ウェブフォーム <https://forms.gle/4UjDQZGKAYE>

【申込期間】8月20日（金）～9月10日（金）17:00

【主催】国文学研究資料館
【共催】一般財団法人正宗文庫・筑波大学人文学部

★次頁には、「正宗文庫セミナー2021」の講師を務めて下さった川崎剛志先生（就実大学）に、当日の講演内容を中心に御寄稿を賜りました。また、小川剛生先生（慶應義塾大学）と中川豊先生（中京大学）の御講演は『調査研究報告』42号（2022年3月刊行予定）に掲載されます。

（神作 研一）

国文学研究資料館創立50周年記念事業

第1回 正宗文庫セミナー

【講師】
国文学研究資料館 学術資料事業部長 藤島綾
国文学研究資料館 学術資料事業部長 小川剛生
国文学研究資料館 学術資料事業部長 丸井貴史
国文学研究資料館 学術資料事業部長 川崎剛志

【開催日時】2021年（令和3年）9月20日（月・祝）13:30～16:30

【場所】Zoomミーティングによるオンライン開催

【定員】150名

【申込方法】事前申込制 先着順

【申込期間】8月20日（金）～9月10日（金）17:00

【主催】国文学研究資料館
【共催】一般財団法人正宗文庫・筑波大学人文学部

国文学研究資料館創立50周年記念事業

賀茂真淵セミナー

【講師】
国文学研究資料館 学術資料事業部長 藤島綾
国文学研究資料館 学術資料事業部長 小川剛生
国文学研究資料館 学術資料事業部長 丸井貴史
国文学研究資料館 学術資料事業部長 川崎剛志

【開催日時】2021年（令和3年）9月23日（祝・木）14:00～17:00

【申込】9月10日（金）17時までに以下のQRコードから 先着70名迄

【主催】国文学研究資料館
【共催】一般財団法人賀茂真淵記念館
【お問い合わせ】info@kokugakuin.or.jp

国文学研究資料館創立50周年記念事業

山田孝雄文庫セミナー

【講師】
国文学研究資料館 学術資料事業部長 藤島綾
国文学研究資料館 学術資料事業部長 小川剛生
国文学研究資料館 学術資料事業部長 丸井貴史
国文学研究資料館 学術資料事業部長 川崎剛志

【開催日時】2021年（令和3年）9月24日（日）13:30～15:30

【申込】9月10日（金）17時までに以下のQRコードから 先着70名迄

【主催】国文学研究資料館
【共催】山田孝雄文庫
【お問い合わせ】info@kokugakuin.or.jp

西大寺縁起絵巻断簡からみる信仰の一齣

正宗文庫は主に、全国から集められた古典籍の優品と、地元の備前市、岡山市とその周辺から集められた郷土資料から成っています。日本文学の研究者のなかでは前者で有名ですが、正宗敦夫氏は後者の収集にも力を注ぎ、それらの書物の冒頭に「郷土」朱印を捺しました。このセミナーでは、国文学研究資料館による調査・研究の成果の一端として、郷土の失われた書庫や経蔵の一部を復元できること、その書物の制作や伝来に関与した人々の営みを解明できることを、金陵山西大寺（岡山市東区）という場を例に示します。

西大寺は備前国を代表する河川のひとつ吉井川の河口付近にある真言宗寺院です。正宗文庫から直線距離では10キロほどです。修正会の際に行われる会陽、裸祭りで有名です。創建は未詳で、古文書等によりその実態が確認できるようになるのは南北朝時代以降です。一山寺院で、別当を担う院は移り変わりましたが、天正末以降は観音院が別当を担ってきました。

江戸前期から中期にかけて、歴代別当は室町時代の古絵巻にならって豪華な縁起絵巻を作り継ぎ、また古勸進帳の保管にも努めました。以後もそれら縁起の資料は厳密に保管されたとみられ、別当の観音院雲翁が寺社奉行廣沢喜之介（1728～48在任）に提出した「西大寺縁起目録」所載の漢文縁起（＝勸進帳）と和文絵入縁起（＝縁起絵巻）の大半が観音院に現存します（川崎剛志、備前国西大寺における縁起絵巻群の形成と保持、『古文書研究』84、2017）。他方、万一の場合に備えた正本の転写は従来確認されませんでした。正宗文庫の蔵書のなかにその種の資料を見つけたことができました。

正宗文庫には西大寺に関連する資料が四点確認されており、そのうち次の二点が縁起の資料です。

- 1 『備前国金岡縣西大寺化縁疏并序』 一冊 *「郷土」印あり
- 2 『西大寺カ縁起絵巻』 断簡一軸（本調査で発見）

このうち1には高名な紋章学者、沼田頼輔氏（1867-1934）の蔵書印「沼田文庫」が捺されており、正宗文庫に入るまでの経路がわかります。沼田氏は明治四十四年（1911）、東京の山内家史編纂所に勤める以前、明治三十六年（1903）に岡山県師範学校教諭、同三十九年（1906）に西大寺高等女学校校長を歴任しており、この時期に本書を入手したとみられます。廃仏毀釈により廃絶した西大寺の子院から巷間に流出した資料の可能性が高く、いま一点も同様の事情で流出したかと類推されます。

両資料の概要を紹介します。1『備前国金岡縣西大寺化縁疏并序』は、江戸中・後期に西大寺の勸進帳四点を合写した、楮紙、袋綴装の写本です。外題「備前西大寺縁起 全」（後補表紙）、扉題「本寺本尊縁起」（原表紙）で、書写当時の外題である後者の「本寺」の文字から、西大寺の内部で書写されたとみられます。ちなみに現在登録されている書名はbの内題に拠っており、適切ではありません。本書所収の四点は次の通りです。

- a.（内題なし）奥書「永享龍集（戊申）（1440）猛夏日／幹縁沙門（宥長）敬白」
- b. 内題「備前国金岡縣西大寺化縁疏并序」、奥書「明応五年（1496）丙辰春／幹縁比丘 等芳謹白」
- c.（内題なし）奥書「永正二年（1505）居諸」＝新出
- d.（内題なし）奥書「大永八年（1521）九月日 勸進沙門心」＝新出

上記四点のうちa・bは観音院蔵の卷子本二軸の本文と一致しており、c・dもおそらく、現在は失われた観音院蔵本の転写と推測されます。本書によって、江戸中・後期まで観音院経蔵に室町時代の勸進帳が四点存在したこと、そして記録保持のためそれらが「縁起」として転写されていたことがわかります。

2「西大寺カ縁起絵巻」は、江戸中期に、観音院蔵『西大寺縁起絵巻（寛文本）』一帖（原絵巻を折本に改装）を転写した絵巻の断簡で、第六段の絵、第七段の詞と絵、及び奥書が残存します。寛文本は観音院蔵の縁起絵巻群のなかでは室町時代の古絵巻（現存本は江戸前期作か）の内容を継ぐ二番目の絵巻で、会陽を描いた現存最古の資料でもあります。本書は寛文本をほぼ忠実に転写したのですが、寛文本とくらべて簡素な作りとなっています。料紙は楮紙で、寛文本を含む観音院蔵絵巻の料紙がすべて、楮紙よりも厚手で、彩色しやすい間似合紙であるのと対照的です。絵具も節約され、霞や水流の彩色が省略されています。よって本書も前記の1と同様に、記録保持のための転写本とみられます。以上、本調査によって、漢文・和文絵入の西大寺縁起の正本が厳密に保管されると同時に、記録保持のため転写されていたことが、はじめて確認できました。さらに記録保持の業務が観音院とは別の子院を含む、西大寺一山として行われていた可能性もみえてきました。

正宗文庫の調査・研究を継続することで、西大寺以外の、郷土の経蔵や書庫の復元についても同様の成果が期待できます。正宗敦夫氏の確かな眼力によって収集されたこの書物群が、明治時代に断絶された、郷土の書物の文化を再生する手がかりを与えてくれると確信しています。

（就実大学人文科学部教授 川崎 剛志）

第14回日本古典文学学術賞受賞者発表

「日本古典文学学術賞」は、財団法人日本古典文学会が主催していた「日本古典文学会賞」を継承し、若手日本古典文学研究者の奨励と援助を目的として、国文学研究資料館賛助会に設置されました。令和3(2021)年で第14回を迎えます。受賞対象者は、対象となる業績の公表時に40歳未満である研究者です(3名以内)。

今回は、令和2(2020)年1月～12月までの著書を対象とし、選考委員会における選考の結果、2名の受賞者が決定いたしました。



瓦井 裕子氏



澤崎 文氏

■第14回日本古典文学学術賞受賞者

瓦井 裕子かわらい ゆうこ(就実大学人文科学部 講師)

研究業績：『王朝和歌史の中の源氏物語』和泉書院

澤崎 文さわさき ふみ(早稲田大学文学学術院 准教授)

研究業績：『古代日本語における万葉仮名表記の研究』塙書房

授賞式は10月15日(金)にオンラインで開催され、受賞者及び選考委員会委員等はZoomで出席し、その他関係者にはYouTubeで限定公開のライブ配信が行われ、授賞式の模様を御覧いただきました。

■第14回日本古典文学学術賞 選考委員

田中 大士たなか ひろし(上代文学会／日本女子大学文学部教授)

高野 晴代たかの はるよ(中古文学会／日本女子大学名誉教授)

佐伯 眞一さえき しんいち(中世文学会／青山学院大学文学部教授) ※委員長

廣瀬千紗子ひろせ ちさこ(日本近世文学会／同志社女子大学名誉教授)

村尾 誠一むらお せいいち(和歌文学会／東京外国語大学名誉教授)

神作 研一かみぞく けんいち(国文学研究資料館賛助会運営委員会委員長・同館副館長)

落合 博志おちあい ひろし(国文学研究資料館教授)

これまでの受賞者などの情報は、当館ウェブサイト日本古典文学学術賞ページを御覧ください。

<https://www.nijl.ac.jp/outline/gakujuyutousyoku.html>

第14回日本古典文学学術賞選考講評

瓦井裕子氏『王朝和歌史の中の源氏物語』

(和泉書院、2020年9月刊)

本書は、『源氏物語』を平安時代の和歌史上に置き、同時代の和歌の状況から『源氏物語』を解釈すること、次に『源氏物語』の享受を通して『源氏物語』が和歌史にどのように関わったかを明らかにしようとするものである。

本書は二部からなり、第一部は「平安文学における類同表現とその解釈」であり、第二部は「平安時代和歌から見る『源氏物語』受容の黎明」と称される。第一部、第二部を通して、和歌と散文の作品を、著者の言葉で言うならば、

「和歌表現という指標を用い、平安時代の和歌と散文との文学的交差を浮かび上がらせる」ことである。

審査の中では「紫式部を含む特定の集団の中で、和歌と散文にわたり、特定の言葉が使われているという状況が、よく描き出されている。現在の『源氏物語』研究の状況を鑑みると、物語、和歌の双方の細部にわたっての目配りの成果として、注目に値するものであろう。その結果、今までに見えなかった細部が浮き彫りにされ、作品の解釈に有効に働いた」とする研究の特徴を評価した。これは、『源氏物語』を和歌の視点から解釈する場合、和歌史の状況を十分に踏まえていることが、当時の文学を支えていた人々と同様に解釈できることになるわけだが、その必須の教養としての和歌と、それを踏まえた物語の解釈において、どちらかに傾くことなく考察がなされた本書のバランスの良さを認めるものである。

たとえば、第一部、第一章『源氏物語』の菊と紅葉の分析は、一条朝の女房の好尚、その発露としての『源氏物語』、その後の和歌への享受など、この研究方法が成功している例である。また、第二部では、妍子周辺女房の哀傷歌と『源氏物語』の受容において、『源氏物語』がいかに読まれ続けたかを見通す興味深い指摘もあった。さらに、第六章「『為信集』成立年代の再検討」は注目すべき指摘である。各歌の検討から、現在通説となっている平安中期の成立年代を下げ、「為信」を紫式部の外祖父として認める説に対して疑義を唱える。その「為信集」を通して、平安末期の物語享受のあり方を伝える可能性をも指摘した点は、重要であろう。これは、『源氏物語』の同時代と思われていた家集の丹念な読みから、導き出されたものであり、既述のように、物語と和歌双方の細部にわたっての目配りがこうした説の提示に至ったと考える。

以上の点により、選考委員会は全員一致で、瓦井裕子氏を日本古典文学学術賞の受賞者に決定した。

(文責 高野 晴代)

澤崎文氏『古代日本語における万葉仮名表記の研究』

(塙書房、2020年2月刊)

本書は、古代日本語の真仮名の表記、いわゆる万葉仮名の表記の性格について、「表記環境」という概念を用いて分析した研究である。たとえば、万葉集の訓字主体の表記において、①訓字 ②訓仮名 ③音仮名の三つに分類されるが、ある訓仮名は、①～③のうちどれのあとに出現しやすいかをはかるのが表記環境の概念である。この概念に基づき、万葉集を中心に上代、平安初期の万葉仮名表記を丁寧分析している。その結果、訓仮名が訓字と読み間違えられそうな場合には読み間違いを防ぐよう音仮名が使用されるといった読み取りへの配慮が全般的に行われていることが証明される。

本書の最も優れた観点は、たとえば「思」(シ)という仮名が字義を考慮して、訓仮名主体表記ではあまり使われていないという現象を説明するとき、「思」の仮名が使われている音仮名表記の場合も、あるいは使われていない音仮名主体の表記の場合でも、等しく「思」の本来の字義に配慮が及んでいると考える点である。字義にこだわらず「思」が使われている場合においても、こだわらなくてもよい環境(読み間違いが生じない環境)であることを考慮に入れた上で使われている点で十分配慮が行き届いているという論理である。この論理は、本書の様々なところに通底しており、万葉集で字義がことさら強調された表記、「旅宿り」を「多日夜取」とするような事例に対して、他の「字義を特に意識せずに使われたとされてきた訓仮名字母」については、字義を目立たなくする配慮が存すると解釈している。つまり、万葉集などの万葉仮名の表記者は、いついかなる場合でも漢字を使用する限り、漢字の字義から抜け出すことは出来ず、常に配慮が求められていたと解しているわけである。このような観点は、字義を意識させる漢字の字形を消失させた仮名(平仮名・片仮名)が、万葉仮名を使用する限りどんな場合でも漢字の字義が執拗について回ることをよく認識している層によって作り出されたという見通しを打ち出すに至る。

本書の分析は、明晰な見通しの元、整然と論が進められているが、個々の万葉仮名の分析に於いてやや強引な解釈が見られる点もある。しかし、その欠陥が全体の構想に大きな支障をもたらすものとはいえない。選考委員会は、満場一致で本書を日本古典文学学術賞に選出した。

(文責 田中 大士)

「絵にかきたる」ような物語と絵に映る歴史 —日本古典籍セミナー北京 2020—

私は、平安物語を中心に研究をしています。本文の中には、「絵にかきたるやう」のような表現がよく見られることから、「絵」というものが前から気になっています。運よくこのような機会に恵まれ、興味深くセミナー「奈良絵本・絵巻・肖像画—図像学へのアプローチ」(2021年2月27日、Zoom ミーティング、主催：国文学研究資料館・北京外国語大学日本語学院・北京日本学研究中心)を拝聴しました。

日本の肖像画については、中国の場合と異なり、日本では最初は仏・菩薩や聖人・高僧だけが肖像画の対象であり、院政期以降となるとようやく天皇や貴族の肖像画が作られるようになる、といった漠然とした認識がありました。黒田智先生のご講義における「公家列影図」という鎌倉時代成立の集団肖像画へのクローズアップは、そういった入門的な知識を遥かに超え、肖像画の世界の一端を開いてくれました。

この文献には、生存年代を合算すると百年以上に跨る計五十七名の大臣が同じ図面に並べられており、その排列順と大臣補任順の関係や、それぞれの面貌の個性的な描き方、さらに、年齢と関わる図像的表現など、黒田先生の丁寧なご講義は勉強になりました。似絵の手法がその群像図に用いられている一方で、生存年代の異なる五十七名の大臣それぞれの顔を絵師がどのように把握し、どの程度虚構を重ねてそれらを描いていたのか、という問題は大変面白く思いました。人物の肖像に焦点を当てると、複数の人物の顔に特徴をつける描き方として、髭や顔の皴、髪の色、朱色の使用などの細かい手法が浮かび上がり、また、図絵の内部に深く切り込み、親族関係にある人物を比較するといった図絵の解読方法など、新しい知識を存分に吸収させていただきました。さらに、朝鮮の肖像画と似絵の関連という、日本と中国以外の東アジア文化圏への注目も、新たな視野を提示してくれました。

今までは、肖像画というものを歴史に関わる資料として見てきました。物語と縁が薄い絵として、お恥ずかしいことに重要視していなかったのです。今回の講義によって考えたのは、肖像画など歴史学と関わる絵に映る歴史的要素こそ重要だということです。例えば集団肖像画で、人物を描く際に絵師が目にするものや、また、複数の人を一定の順で並べると見えてくる顔の特徴(例えば髭のありなし)などは、その時代の社会的意識や規則をよく反映できる歴史的素材そのものでした。私は、文学も絵も同じ歴史の土壌から離れては成り立たないものであり、これからは自分の専門にだけ目を向けず、肖像画や歴史的図像にも注意を払いたいと思います。

一方、石川透先生のご講義における奈良絵本については実は初めて触れる領域ではありませんが、その創作背景、また、種類の多様性については講義を通して勉強になりました。文字のみによって構築されている物語世界に慣れている私にとっては、鮮明な色とビジュアルな人物表現などで構成される奈良絵本は興味深かったです。特に、時代性にも関係しているかもしれませんが、風雅に満ちた宮廷・貴族の生活空間だけでなく、庶民が暮らす町の景色や、さらに、幻想・神話的要素の含まれる世界も、図絵が鮮明に視覚的認識をもたらしてくれました。その中でも、巨人・小人島を描く絵巻『御曹子島渡り』と『ガリバー旅行記』の関係は、日本の絵巻が西洋文学に影響を及ぼす可能性を窺わせ、特に印象深く思いました。

物語を研究する際には、絵画表象への目配りが不可欠なのでしょう。かの有名な「絵合」の巻に登場する絵巻もそうですが、古くから物語とともに観賞用の絵が作られ、物語とともに存在していると思います。それは、つまり絵というものは文字と同じように物語を紡ぐ能力を持っていることになります。文字だけで構成される物語の空間は、読み手の想像力に頼っている部分があると思われまます。絵でできる物語はその想像力の自由を一部削りますが、その代わりに、鮮やかな色と鮮明な構図、また、表情や仕草まで写實的に描かれた人物などによって、物語の場面を読み手の目の前に届けます。古くから人々は、この二種類の方法によって物語を享受していることが、重要ではないかと思えます。

この認識に至ったのは、「絵にかきたるやう」などの言い回しについて考えたからです。「絵に描いているようだ」という言い方は、作中人物もその作者にとっても、「絵」のイメージがはっきりとしていることを意味しています。それは物語絵であったり、また、屏風絵や仏教関係の絵巻、さらに、古代日本に渡ったであろう唐画などであったりする可能性も考えられます。物語によって絵は作られ、逆に、屏風絵を見て和歌や漢詩を詠むと同様に、絵の中の風景からは物語も生じます。私個人の関心で言えば、仏教的雰囲気や神仙世界の景色をいかにも写實的に描写している『うつほ物語』『俊蔭』の巻が、その例にあたるでしょう。物語を研究する際は、そうした物語と絵の関係を視野に入れなければならない、と講義を聞いてつくづく思いました。

小さい時、英語版の『西遊記』を、英語の全く読めない父が解説してくれた記憶があります。抽象的な文字の空間を紙面という具体的なものの上に表現し、享受者に直接的なインパクトを与えることは、図像学の魅力の一つだと思います。歴史や文化は無論、古典文学を研究対象にする者としても、「絵」の重要性を蔑ろにできないと思われまます。

(北京外国語大学北京日本学研究中心博士後期課程 趙 小菁)

特別展示「復興を支える地域の文化 —3.11 から 10年—

2021年8月4日(水)から9月29日(水)にかけて、当館展示室で特別展示「復興を支える地域の文化 —3.11 から 10年—」を開催しました。この特別展示は2021年3月4日から5月18日にかけて国立民族学博物館で開催を予定していたもののうち、展示の重要なエッセンスを抽出して行いました。国立民族学博物館での展示は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、途中で閉幕せざるを得なくなってしまう、当館の特別展示も月・水・金曜日のみの開室、完全予約制、人数制限をせざるを得ませんでした、多くの方が来館しました。

そもそも人間文化研究機構では、2016年度より広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」をスタートさせました。このプロジェクトでは、人間文化研究機構に属する国立歴史民俗博物館・国立国語研究所・国立民族学博物館・総合地球環境学研究所、そして国文学研究資料館が日本列島において地域が直面しているさまざまな課題、特に災害によって多様性が失われつつある状況が惹起する諸問題とその解決に向けて、「地域文化」という切り口で行った共同研究です。この成果発表のひとつとして特別展示を行いました。

当館は福島県における東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故による被災地での歴史資料保全と活用に関するモバイルミュージアムの展示を行いました。また、被災地で歴史資料を救出・保全する動画や作業着・タイベックスーツの実物、天野真志さん(国立歴史民俗博物館特任准教授)らと連携して編纂した『大字誌ふるさと請戸』(蕃山房、2018年)などの展示も行いました。

東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故から2021年で10年が経ちました。いまだに避難生活を余儀なくされている方も多く復興の途上です。その中で「地域文化」に何ができるかを提示できた展示であったと自負しています。(西村 慎太郎)



特別展示のモバイルミュージアム

企画展示「国文研ってどんどころ?～多摩地域ゆかりの所蔵品とともに～」

2021年10月4日(月)から2022年1月6日(木)まで、多摩信用金庫地域貢献スペース(たましん本店本部棟2階北側通路)にて、企画展示「国文研ってどんどころ?～多摩地域ゆかりの所蔵品とともに～」を開催しました。地域貢献スペースとは、文化・芸術を中心とする多摩地域の魅力を発信すること、多摩地域を拠点とした創作活動の発展に寄与することを目的として、多摩信用金庫が美術系大学生や若手作家、社会貢献を行う団体むけに無償で提供している展示スペースです。

今回の展示では、立川市柴崎町の普濟寺が刊行した経典類の一冊『普濟寺版大方広仏華嚴経』、正保年間に作成された5メートル四方の『武蔵国絵図』、多摩川の鮎漁の様子を描いた絵図など、多摩地域の信仰・文化・名産に関する資料を中心に展示しました。多摩地域に関する資料だけでなく、鎌倉時代の万葉集断簡(国宝)から江戸時代に作られた親指ほどのサイズの子ども絵本『雛本八種』まで、当館の代表的な所蔵資料も展示しつつ、パネルで当館の取り組みを紹介しました。

地域貢献スペースは商業施設が林立する賑やかな広場の一角にあります。これまで国文研を利用したことのない人にむけて古典籍の魅力を発信する絶好の場所ではありますが、資料を平置きすることが難しく、また直射日光を避けられない等の課題がありました。そのため、今回の企画展示ではすべて複製資料を用いることとし、パネル展示も取り入れながら、古典籍・古文書の魅力をわかりやすく解説することにしました。今後もこうした地域との連携を継続し、多摩地域の文化・芸術の発展に貢献したいと考えています。(糸 汐里)



2021年度こくぶんけんカフェ 渋沢栄一生誕記念「渋沢青淵翁記念実業博物館」の再現

2021年12月1日(水)15時より、多摩信用金庫セミナールームにて、こくぶんけんカフェが開催されました。「こくぶんけんカフェ」とは、当館の研究者がカフェのようなりラックスした雰囲気の中で、受講者と会話をしながら研究の魅力を伝えるイベントです。第1回は史料保存に関する研究を専門とする青木睦准教授が講師を務め、「渋沢栄一生誕記念「渋沢青淵翁記念実業博物館」の再現」と題して、これまでの研究のあゆみを振り返りました。

「渋沢青淵翁記念実業博物館」は、日本の実業家・渋沢栄一(1840—1931)の亡き後、嫡孫である渋沢敬三(1896—1963)が中心となって構想したものの、アジア・太平洋戦争の戦時下で様々な困難に見舞われ、設立に至らなかった幻の日本実業史博物館です。設立のために収集された膨大な資料の一部は、昭和26年(1951)に国文研の前身となる文部省史料館に「日本実業史博物館準備室旧蔵資料」として収蔵され、現在は当館のホームページにある電子資料館の「日本実業史博物館コレクションデータベース」からも検索ができます。

前半は渋沢栄一、敬三の経歴からコレクション収集の過程、博物館設立と断念にいたる経緯について、後半は国文研のコレクションとして保存・管理されるまでの研究の険しい道のりについてお話があり、参加者はスライドの写真をしながら熱心に聞き入っていました。終了後も質問が多く寄せられ、短い時間ながらも充実した講座となりました。

昨年放送されたNHK大河ドラマ「青天を衝け」の影響もあり、注目を集めている渋沢栄一。しかしながら、渋沢栄一と敬三に関わる貴重な資料の多くを当館が所蔵している事実は、一般にはあまり知られていません。今後も知られざる当館の資料や研究活動の一端を、こくぶんけんカフェをという機会を通じて、広く発信していきたいと思えます。(糸 汐里)



電子展示室「和書のさまざま」公開のお知らせ

日頃ご利用いただいている当館展示については、事前予約制や人数制限などご不便をおかけしています。また、展示室の設備工事のためこの冬通常展示をお休みしております。その間、代わりにインターネットで展示を鑑賞していただけるよう【電子展示室】を始めました。また今後の予期せぬ事態への備え、更に今後の新しい展示活動のあり方などを見据えた第一歩でもあり、何時でも何処からでも展示を楽しんでいただけるよう取り組んでいきます。

まずは「和書のさまざま」を1月より公開しています。和書のさまざまな姿や特色を紹介した書誌学の基礎を理解できる内容です。展示資料のデジタル写真を見ながら順路に沿って解説を読み進んでください。Webならではの解説ビデオも見られます。実演しながらの分かり易い説明になっています。展示構成を眺めて興味ある所から覗いたり、書誌学用語を調べて図鑑のように使ったりもできます。興味の赴くまま、自由に電子空間の展示を巡り歩いてください。

国内遠方や海外から来館が難しい方にも、豊かな和書の世界に触れていただく機会になれば幸いです。もう一つの「書物で見る 日本古典文学史」も来年度公開予定しています。ご期待ください。(北村 啓子)



「和書のさまざま」の入口

<https://www.nijl.ac.jp/koten/webtenji/washosama.html>

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

2021年度オープンキャンパス（入試説明会）オンラインで開催

10月2日（土）、日本文学研究専攻ではオープンキャンパス（入試説明会）をオンラインで開催しました。他大学の修士課程に在籍する学生や、仕事を続けながら博士課程への進学を検討中の社会人などの参加がありました。

参加者は専攻の特色や入試について説明を受けた後、海野圭介教授、入口敦志教授、山本嘉孝准教授による研究紹介を聴講し、国文学研究資料館を基盤機関とする当専攻ならではの幅広い研究分野と、膨大な原典資料から情報を収集していく「もの」に即した研究方法の一端にふれました。

教員との個別相談では、研究の進め方やより研究を深めるための視点、入学後の研究指導について、熱心に耳を傾けていました。また、実際の研究生活について、心置きなく話していただけるよう、参加者と在学生、修了生のみで懇談する時間も設けました。

参加者の皆様には、今後の研究の進め方や進学後のイメージをより明確なものにしていただけたことと思います。



海野教授による研究紹介

「日本を研究対象とする学生のための英語講習会」開催

9月から11月にかけて、日本文学研究専攻では「日本を研究対象とする学生のための英語講習会」をオンラインで開催しました。

この講習会は、日頃英語から離れている学生に英語感覚を取り戻してもらい、各自の研究内容に関する英語表現を身につけてもらうことをねらいとして、年に計6日間、開催しており、文化科学研究科の他専攻からも受講生を受け入れています。講師には、日本文学研究者でもあり、翻訳・通訳者等としてご活躍中のファリア・アンナマリエ氏 (Ph.D.) をお迎えしています。

受講生は講師からアドバイスを受け、学会など学術的な場面で用いる英語表現を用いて、各自の研究紹介文作成に取り組みました。受講生と講師双方が、オンライン会議システムのチャット機能に英文を書き込みながら発言するなど、対面開催の場合の板書や添削に代わる方法を用いながら活発にコミュニケーションをとる様子が見られました。

受講生は引き続き、2月に予定している最終回でのプレゼンテーションに向けて、英文要旨作成と発表練習に取り組めます。



講師のファリア・アンナマリエ氏 (Ph.D.) からアドバイスを受ける受講者

国文学研究資料館創立 50 周年記念式典・講演会・展示のお知らせ

1972年に創立した国文学研究資料館は2022年に50周年を迎えます。そこで50周年事業として以下のとおり記念式典・講演会・展示を計画しています。

- 記念式典・講演（オンライン）

開催日：2022年5月13日（金）13時30分～17時

基調講演 田淵句美子（早稲田大学教授）

※基調講演に引き続いて研究者8名に国文学研究資料館の事業の過去・現在・未来を語って頂きます。

- 記念講演会

開催日：2022年5月14日（土）13時～14時45分

講演1 渡部泰明（国文学研究資料館館長）

講演2 林望（作家・書誌学者）

- 特別展示

開催日：2022年5月13日（金）～8月下旬（予定）

※展示では、国文学研究資料館の研究者による古典籍・古文書、館蔵の貴重な資料を紹介いたします。展示図録も刊行予定です。

その他、50周年記念特設 WEB ページの作成も進めています。これらの詳細については随時ホームページ及び SNS で告知します。 (西村 慎太郎)

表紙絵資料紹介

とくだいせんひつご
『得泰船筆語』〔近世後期〕木活字本。2巻2冊、縦21.9×横14.5cm。

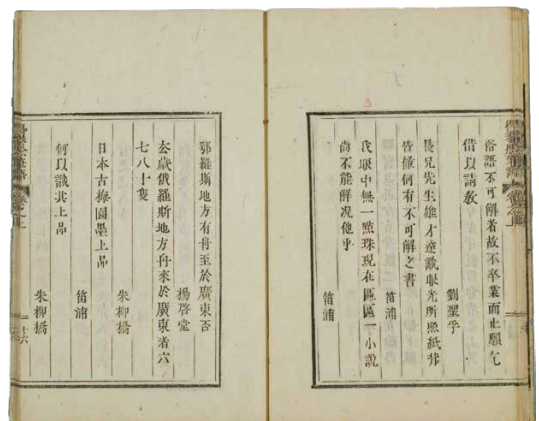
中村真一郎江戸漢詩文コレクション【87-511】。<https://doi.org/10.20730/200012198>

本書は、文政9年(1826)、航路からはずれて遠州(現静岡県西部)沖に漂着した清朝中国の商船、得泰船の乗組員たちが、長崎に送還される途中、日本の儒者、野田笛浦(1799～1859)と漢文で筆談した内容の抜粋であり、紀州藩にて木活字で印刷された。書型はやや縦長で、上巻には色紙を用いた見返しが付けられ、すっきりとして瀟洒なおもむきの書物である。デジタル画像は当館の新日本古典籍総合データベースで公開されている。

筆談の内容は多岐に及ぶ。日本の書物では『万葉集』や『武鑑』が話題に上り、奈良の古梅園の墨の品評も載る。得泰船に『聊齋志異』や『今古奇観』が積んであったことや、これらの小説を笛浦はすでに読んでいたが、『今古奇観』は「俗語」(白話の語彙)が多く、読むのに苦労したことも記されている。

笛浦は中国にきたロシア船についても情報収集しており、当時の緊迫した国際情勢が垣間見える。本書の現代日本語訳は、田中謙二「得泰船筆語訳注」(『江戸時代漂着唐船資料集』2、および『田中謙二著作集』第3巻所収)を参照されたい。(山本 嘉孝)

★中村真一郎江戸漢詩文コレクションは、作家、中村真一郎(1918～1997)の旧蔵書825点と自筆原稿『江戸漢詩に関する創作ノート』から成る。中村は、小説『雲のゆき来』、評伝『頼山陽とその時代』・『木村兼葭堂のサロン』、評論『詩人の庭』などを著し、戦後日本で近世日本漢詩文が再評価される契機を作った。人間文化研究機構 国文学研究資料館 普及・連携活動事業部(編)『中村真一郎江戸漢詩文コレクション』(2007年、執筆者：佐岐えりぬ、ロバート キャンベル、堀川貴司、鈴木一正)参照。



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

国文研ニューズNo.60
発行日 令和4(2022)年1月19日
編集 国文学研究資料館 企画広報室
製作 株式会社 アズディップ
©人間文化研究機構国文学研究資料館